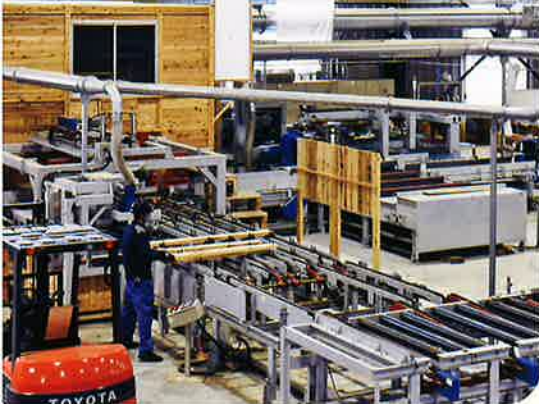




本格稼働向けプレスラインの調整を繰り返し行う。ひき板は、この後効率よく接着を行うプレス機へ送られる



機械乾燥を行うボイラー棟



プレス作業を待つばかりのひき板が長さや幅ごとに整然と並ぶ

※FLAMとは福島高度集成材製造センターの英文表記
Fukushima Advanced Manufacturing Center For Laminated Timberの
頭文字を再構成した愛称

じたて継ぎ（ジョイント）を行い所定の長さにします。そして、強度の高いひき板を外側に、低いひき板は内側にして接着し、確かな強度の集成材に仕上げます」

FLAMでは、学校や工場など大型施設に使われる、中断面・大断面の集成材を量産している。「大断面は、断面の短辺15センチ以上、面積300平方センチ以上のものを言い、それ以下3／8以上の断面積までのものを中断面と言います。ここでいう断面とは木材の木口にあたる面のこと、積み上げられた大断面集成材の迫力に圧倒される。集成材は、耐火性や加工精

度がより向上しており、2019年に完成した新国立競技場に使われるなど、今や注目の建材だ。工場では最大で、長さ12メートル、幅が巨大な集成材が生産可能で、高層ビルの建築材としての需要も見込む。

何枚ものひき板を高周波による熱で数10分のうちに接着するデンマーク製プレス機など、最新鋭の機械に目を引かれるが、工場を支えるのは何と言ってもマンパワーだ。大木の丸太を次々と移動する

人、プレスラインを繰り返し調整する人、手作業で丹念に集成材の仕上作業を行う人など、現在20名ほどの社員が働く。が、フル稼働時に必要な人員は50名にのぼるため、随時社員募集中とのこと。

高性能で地球にも優しい集成材の未来は、新次元に入りつつある。浪江町、浜通り再生の星となる日は遠くないはずだ。そしてFLAMが本格稼働するとき、本県林業の新次元もまた開かれるのでは、と楽しみでならない。



何枚もの板を重ねて出来上がる集成材。現場ですぐ組み上げられるよう事前加工するプレカット済みで、原木からプレカット加工まで一貫生産することで建材費のコストダウンも図る

福島県の林業を浜から牽引!!

けん いん



浪江町、そして浜通り再生の一翼を担う施設だと聞いていた。その期待を背負い、昨年10月に集成材工場が完成。今年3月に残る製材工場の工事が完了したと聞き、桜が舞う4月中旬、浪江町棚塩産業団地に福島高度集成材製造センター（FLAM）を訪ねた。

あいにく製造ラインはまだ試運転中とのことだったが、製材工場エリアでは丸太を運ぶフォークリフトが絶え間なく行き

丸太を素早くリフトに載せ、奥の製材棟へ次々と運ぶ。原木は福島県産を中心に調達する

浪江町、そして浜通り再生の一翼を担う施設だと聞いていた。その期待を背負い、昨年10月に集成材工場が完成。今年3月に残る製材工場の工事が完了したと聞き、桜が舞う4月中旬、浪江町棚塩産業団地に福島高度集成材製造センター（FLAM）を訪ねた。

あいにく製造ラインはまだ試運転中とのことだったが、製材工場エリアでは丸太を運ぶフォークリフトが絶え間なく行き

中・大断面の集成材を量産

キーワードは
マン
パワー



生産管理部長
阿部 孝紀さん

浪江町、浜通り再生のために
地元雇用を創出していきたい



ひときわ存在感を放っていた完成間近の大断面集成材。機械による仕上げが難しい部分は一番最後に人が仕上げる



福島高度集成材製造センター（FLAM） 浪江町

取材二ぼれ話

世界的建築家の隈研吾氏と進める「浪江駅周辺整備事業」にも活用予定！

FLAMで造られる集成材は、浪江町の新しい顔となる「浪江駅周辺整備事業」に活用されることが予定されています。このプロジェクトは、新国立競技場をデザインした世界的建築家である隈研吾氏らと進められています。「木材を生かした環境モデルとして世界に発信できる未来のまちづくりを目指す」と言う隈氏。2023年度に着工予定の浪江駅周辺への期待が膨らみます。